様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　4　月　27　日現在

機関番号：６２５０１
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2008 ～ 2010
課題番号：２０７２０２１４
研究課題名（和文）中近世における聖地の形成・展開・消失
研究課題名（英文）Formation, evolution and extinction of holy place in the middle age
研究代表者
村木 二郎（MURAKI JIRO）
国立歴史民俗博物館・研究部・准教授
研究者番号：５０３２１５４２

研究成果の概要（和文）：
経塚の中には造営後 100 年以上もしてから、その周囲に墓地が展開する例がしばしば見受けられる。これは、経塚が惣供養塔と同様に聖地のシンボルと認識されていた証拠である。
経塚には様々な副納品が含まれるが、仏像あるいは鏡像が納められているケースがある。これらは必ず経巻と対等な位置に埋める。すなわち、経塚の経巻は仏＝法舎利として埋納されており、経塚は擬似的なストゥーパと考えられる。経塚は地域社会に聖地を形成するきっかけとなった。

研究成果の概要（英文）：
After taking 100 years or more after erection into a sutra mound, the example which a cemetery develops to the circumference can often see. This is a proof with which the sutra mound is recognized to be a symbol of a holy place like a stone pagoda.
Although various subdelivery of goods is included in a sutra mound, there is a case where the Buddha statue or the mirror image is dedicated. These are buried in the position on a level with a roll of sutras certainly. That is, the roll of sutras of the sutra mound is buried as Buddha = spiritual bone, and a sutra mound is considered to be false pagoda. The sutra mound became a cause which forms a holy place in a community.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
総　計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・考古学
キーワード：歴史考古学

１．研究開始当初の背景
墓地の中心に立つ大型石塔が惣供養塔として求心力を持ち、聖地のシンボルとして機能する。これは 13 世紀末頃から畿内を中心に広がる慣行で、現代にまでつながっている地域も存在する。これと同様な意義が 12 世紀代に全国的に盛行する経塚にも求められそうである。
古代とは異なり庶民層にまで浸透する中世仏教のあり方を、考古学的に解明する手がかりとして有効ではなかろうか。

２．研究の目的
中世の信仰世界は、古代とは異なり、庶民層により身近なものとなり、地域社会に新たな聖地を生み出した。それはたとえば、中世

半ばの大型石塔に象徴される惣供養塔の研究として成果をあげている。

しかし、中世初頭の激動の社会変化のなかに、その端緒は求められるべきである。それが、経塚の存在である。末法思想を背景に作善業の一形態として造営された経塚が、全国各地に根付いていった理由の一つが、地域社会への聖地の拡散と関係があると考え、その展開を追う。

また、経塚が下火になって以降、板碑や五輪塔、宝篋印塔などの石塔類が増加する。本来的には、供養塔として立てられた石塔類は、次第に建立階層を広めて墓標的性格を深めるようになる。従来、中世段階での墓標建立層はまだまだ有力者層に限られると考えられてきたものの、その実態把握は困難であった。そこで、中世後期の小型石塔類をもう少し丹念に取り扱うことで、墓標建立階層の広がりを考えるための基礎資料を蓄積することとする。

３．研究の方法

従来の経塚研究は、遺物研究が重視されてきた。これは経塚が不時発見例が多く、良好な遺跡情報を蓄積できていなかったためである。しかし近年の発掘成果は研究状況を大きく変え、詳細な遺跡情報を蓄えた。

そこで、その後の周辺遺跡の展開を追える経塚について事例を収集し、経塚を単体ではなく遺跡全体および後世の存在形態に着目して分析する。

一方、近年、関東の安山岩製小型石塔類は生産地資料が押さえられるまでになってきた。そもそも、安山岩の採掘地が限定される関東において、広範に分布する安山岩製小型石塔類の存在は、多くの可能性を秘めている。従来見逃されがちであった小型石塔類は、石塔建立階層の広がりをとらえるための重要な素材と位置付けられるため、特に房総半島における状況を把握しながら、その意味を探りたい。

４．研究成果

大型石塔の惣供養塔としての在り方にヒントを得て、造営後の経塚の存在意義に着目した。経塚は本来は、作善業の結果であり、つくることに意義があったはずである。そのため、造営後はその存在は忘れ去られても構わないものである。

しかし、経塚の中には造営後 100 年以上もしてから、その周囲に墓地が展開する例がしばしば見受けられる。とくに近世の経塚の中には、村落の共同墓地をつくる前提に経塚を供養しているものまである。これは、経塚が惣供養塔と同様に聖地のシンボルと認識されていた証拠である。

具体例を見てみよう。京都府大道寺遺跡は、竹製経筒が出土したことで著名である。この経塚は、須恵質甕及び鉢を転用した外容器を用いるが、その年代より 13 世紀初頭に営まれたと考えられている。その周囲には中世墓が 27 基発掘調査で見つかっているが、蔵骨器の年代から、南北朝期をピークに鎌倉時代から室町時代にかけて展開したことが分かる。寺院跡からは遺物が出土していないため寺院の存続時期は不明である。これらから、大道寺遺跡では経塚がつくられてからしばらくして、周囲に墓地が展開したことになる。兵庫県新宮山遺跡では、中世以来の寺院である新宮山満福寺の旧坊跡下方にある地蔵丘の尾根端部から、2 基の経塚が見つかっている。外容器の年代が 12 世紀の半ばであることから、経塚がつくられた年代もそれに近いと考えられている。この丘一帯からは中世墓が 37 基発掘されており、それらしい遺構を含めれば 70～80 基はあるという。これらの蔵骨器の年代は鎌倉時代から室町時代前半とされており、経塚がつくられてからしばらくの間隔をおいて中世墓が広がったことになる。奈良県広瀬地蔵山遺跡は、丘陵の先端に平場を造成して経塚をつくっている。発掘調査で見つかったのは 1 基だけであるが、上部を削平された同様の遺構がすぐそばにもあることから、これも経塚であった可能性は高い。この経塚からは瓦質の経容器が見つかっており、他の遺跡から出土するものを参考にして 12 世紀末～13 世紀前半頃の造営と考えられている。この経塚を取り巻くように、14 世紀から 16 世紀前半代の中世墓が位置し、さらに近世の石塔が林立している。この遺跡も、経塚がつくられてから 100 年ほどのちに墓地が展開したことになる。岩手県上須々孫館遺跡は、舌状台地の先端に 2 基の経塚がつくられている。いずれも大きな葺石をもったマウンドで、中央付近に石室を構える。その中から、陶器の壺が出土しており、12 世紀末頃に経塚が営まれたことが分かる。経塚の東側には元亨 3 年（1323）銘の板碑が建てられている。発掘調査はおこなわれなかったものの、板碑周囲には火葬骨が散らばっており、墓地であったことがわかる。この遺跡も、経塚が先行したのちに、付近に墓地を営んだものと考えられよう。近年の調査事例としては、静岡県堂ヶ谷遺跡が好例である。古代以来、数度にわたって建て替えられた寺院跡の背後から、経塚が 3 基見つかっている。そのうちの 1 号経塚は特に副納品も多く、手厚い供養がおこなわれたものと考えられている。鏡が 16 面、刀剣類では担当が 63 本と折り曲げた太刀が 1 本。それらに守られるかのようにして、石槨状に囲った石組の中から、土製経容器に納められた青銅鋳造製経筒が見つかった。経筒のは、畿内の二段笠蓋式に類似したものであり、東国では極めて珍しい。この

3 基の経塚の上に、中世墓が 1 基つくられている。またほかにも、付近には中世墓と思われる遺構が展開している。このように、経塚が造営されてしばらくしてから、その周囲に墓地が展開するという複合遺跡は各地で確認されているのである。近世の史料には、共同墓地の存在しない村にやってきた聖が一字一石経を書写して寄進してくれたので、それを埋納することでようやく共同墓地をつくることができた、とするものがある。これなど、墓地の前提に経塚の存在が位置づけられているのであり、中世で見られた流れの行きつく先とも考えられよう。経塚は本来、極楽往生を願って営まれた作善業の結果である。作善業であれば、経塚をつくるという行為自体に意味があるわけで、つくったあとは忘れ去られてしまうはずである。にもかかわらず、数十年、百年もたったのちに、その地を意識して墓地が展開するというのは、経塚が造営されたあともその地が記憶されていたわけで、つくったあとの経塚の意義も考えねばならない。すなわち、聖なる場所としての意義が付与されているのである。そのために、往生を願う人々が、その地に埋葬されることを望んだのである。

では、なぜ経塚に聖性があるのか。これは経塚の遺構分析からその手がかりを得ることができた。経塚には様々な副納品が含まれるが、仏像あるいは鏡像が納められているケースがある。仏の代替物であるが、これらが納められる場所を分析してみた。

まず仏像についてであるが、そもそも出土例が非常に少ない。しかも出土状況の分かっているものとなると、ごくわずかである。例えば有名なものとして、福岡県宝満Ａ経塚から「推古仏」とされる古い様式の金銅菩薩立像が見つかっている。これには経筒の中に納められていたのではないかとか、経筒の横に瓦で囲った空間がありその中に仏像が入っていたといった話が流布している。しかしいずれも正しい出土状況を伝えるものとしては信憑性が低い。唯一参考になるのが、鳥取県倭文神社経塚の例である。この経塚は経筒に康和五年（1103）の紀年銘が記された全国有数の古い経塚である。石室の中央にこの経筒が据えられ、東側に観音菩薩立像と千手観音菩薩立像の 2 体が、西側に銅板に線刻した弥勒立像 1 体が置かれていた。この石室には東側に別区画を設けて、鏡や短刀、銅銭、檜扇などが納められていたのである。これは、前者を主室、後者を副室と呼ぶことができ、主室の中では、経筒と仏像が対等な立ち位置に並べられているのである。

この 1 例だけをもとにして論じるわけにもいかないことから、鏡像を利用することにした。鏡像は鏡の表面に仏像を刻んだものである。鏡は経塚の副納品としては代表格であり、経筒の一部に使われたり、内部に納められたり、石室の内外、あるいはマウンドの葺石の中など、さまざまな箇所から見つかる。おそらく、埋納過程を反映して、多様な用いられ方をしたのであろうが、その逐一の用途を押さえるまでには至っていない。ただし例外的なのは鏡像である。

京都府花背別所経塚群は仁平三年（1153）や保元二年（1157）といった 12 世紀半ばの紀年銘資料を伴った 8 基の経塚から構成される。その第六経塚は、石室の奥の中央に陶製容器をふたつ並べ、その手前や脇に密教法具や刀子、短刀、青白磁合子などをおさめていた。この陶製容器のひとつは牡丹唐草文を線刻した特殊なものであるが、その中から如来像を刻んだ鏡像が見つかっている。この容器には有機質の経筒または経巻が直接納められていたと考えられるので、鏡像はそれらと同位置に納められたわけである。三重県朝熊山経塚群は 40 基以上の経塚からなる大規模な経塚群で、保元元年（1156）、嘉応元年（1169）、文治二年（1186）といった 12 世紀半ばから後半代にかけて営まれた。このうち 3 号Ａ経塚から出土した青銅鋳造製経筒の中から阿弥陀如来像を線刻した鏡像が見つかっている。これは経巻と鏡像を同位置に納めた事例である。京都府栃谷経塚からは、土師質外容器の中から青銅鋳造製の経筒と鏡像が一緒に見つかっている。この経筒は小型でシンプルな一段笠蓋Ａ式経筒で、鏡の径よりも細いものである。そのため鏡像を中に納めることができなかったからか、経筒と鏡像を外容器に納めている。しかし、副納品が納められることの多い外容器外でないのは重要で、これもやはり経巻と同等の位置に置かれたと考えてよかろう。京都府河原山経塚も似たような例で、石室内に置かれた土師質の外容器内から銅板製経筒と一緒に仏像を線刻した銅板が見つかっている。これは鏡像ではなく懸仏の類いであるが、意味合いは同じである。

このように、鏡像の納められる位置は必ず経巻に最も近い位置であるのは、一般的な鏡の埋納位置と比べれば特殊であることがわかる。これは、鏡像が仏像と同じく、「仏」の代替物として認識されているからであおう。これを前提に、以上見てきた仏像・鏡像の埋納位置を振り返ってみると、いずれも経巻と対等の位置であることが分かる。これは、経塚に納められた経巻が、単なる作善業の結果としての写経ではなく、仏＝法舎利として意識されていた証しであろう。このことから、経塚とは仏が埋められた特別な場所、すなわち擬似的なストゥーパと考えられるわけで、当然のことながら忘れ去られるものではなく聖なる場所として人びとに意識され続けたのである。こうして、経塚の造営は聖地の

形成と意義づけることができた。全国各地に経塚がつくられていった意味も、在地社会に新たな聖地を形成すると捉えることで、理解できるようになる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
①村木二郎「聖地の形成と展開」『信仰と儀礼の歴史学』歴史研究の最前線 14、査読無、pp.8-31、2012
②村木二郎「都市領域と経塚」『都市のかたち」中世都市研究 16、査読無、pp.151-165、2011
③村木二郎「四天王寺の経塚」『経塚考古学論攷』、査読無、pp.167-181、2011
④村木二郎「経塚出土銭からみた大銭の利用」『遠古登攀』、査読無、pp.263-275、2010
⑤村木二郎「房総の石塔にみる搬入品と在地品」『中世東アジアにおける技術の交流と移転』査読無、pp.97-106、2010

〔学会発表〕（計３件）
①村木二郎「近畿の経塚とその影響」『シンポジウム 祈りの世界－北部九州の霊山と経塚－』九州歴史資料館、2012 年 1 月 29 日、九州国立博物館
②村木二郎「全国の経塚からみた堂ヶ谷」『シンポジウム 平安時代の祈りと願い』静岡県埋蔵文化財調査研究所、2010 年 10 月 3 日、静岡県立美術館
③村木二郎「都市領域と経塚」『都市のかたち－権力と領域－』2010 年度中世都市研究会、2010 年 9 月 5 日、平泉温泉元湯ホテル武蔵坊

〔図書〕（計２件）
①村木二郎編著『特集 中世の生産技術』歴博 160 号、pp.1-32、2010、国立歴史民俗博物館
②村木二郎編著『特集 石の加工』歴博 155 号、pp.1-32、2009、国立歴史民俗博物館

６．研究組織
(1)研究代表者　村木　二郎（MURAKI JIRO）
　国立歴史民俗博物館・研究部・准教授
　研究者番号：50321542